

巻頭言

AI を社会に根付かせるために



吉住 貴幸
(IBM 東京基礎研究所)

筆者は1年ほど前から財務担当理事を拝命しており、財務の面から本学会を見ております。ここ数年、個人会員数、賛助会員数ともに順調に増加しており、財務的観点での本学会は極めて健全といえます。この会員数の増加は、近年のAIの盛り上がりによるところが大きいことは間違いありません。

筆者は企業研究所でAIの研究に従事していますが、最近では基礎研究に加えて、AIをはじめとした基礎技術のビジネス応用にも積極的に関与するようになりました。多種多様な業種の方々と会話する機会があるのですが、そのような場面でAIに対する時に異常なまでの期待の高さを肌感覚として感じます（もちろん、専門分野がAIではない方々ですが）。このような経験から、世間がAIに対して抱いている期待の高さと、今のAIで現実的に実現できることのギャップはかなり大きいと感じます。当然、今後の研究者の努力により、このギャップは小さくなっていくとは思いますが、5～10年で埋まるようなギャップではないとも思います。AIに関わる多くの研究者、技術者の方が筆者と似たような経験をしていることは想像に難くありません。おそらくこのような経験を通して、多くの有識者が今のAIの盛り上がり、第三次AIブーム、時にはAIバブルと表現しており、近い将来終焉を迎えると考えているのでは、と思います。かく言う筆者も、自身の経験から、近い将来この盛り上が冷めてしまうことを危惧しています。しかしその一方で、今のAIの盛り上がりが一時的な熱狂に終わらず、AIが社会の隅々にまで根付く歴史的転換点になる可能性も少なからずあると考えています。

今のAIの盛り上がり第三次AIブームと表現する背景には、当然、1950～60年代の第一次AIブーム、および1980年代の第二次AIブームの存在があります。筆者自身は過去2回のAIブームを実体験はしていないので一部は想像になるのですが、今の盛り上がりは過去2回のブームと比べて質的に違うものになり得るのではないかと考えています。

筆者が勤めている企業を含め、コンピュータ関連企業はかつての物を売るというビジネスから、サービスを創出するというビジネスに形態を変えてきています。コンピュータ関連企業における基礎研究部門の主たる役割は、以前はハードウェアとしてのコンピュータを構成する主要なコンポーネントを研究することでした。その後、研究対象は音声認識やデータベースなどのソフトウェアが主流になっていき、2000年以降は各種IT技術を使っての実世界の課題解決、さらには新規サービス創出も基礎研究部門の重要なミッションの一つとなってきています。AIに関して言うと、AIのビジネス化、つまりAIを核とした事業をつくり上げるという強いインセンティブが、今のコンピュータ関連企業の基礎研究部門にはあります。このようなインセンティブは過去二度のAIブームの頃とは比較にならないくらい大きいのでは、と想像します。一般に、企業において基礎研究の成果を事業化するには、技術的課題以外にもいくつかの関門を突破しなければなりません。それらは「魔の川」、「死の谷」、「ダーウィンの海」などと表現されることもあり、時として技術課題の解決よりも困難なものになることもあります。現代のコンピュータ関連企業における、AI事業を推進する強いインセンティブは、これらの関門を突破する後押しにもなり得、AIに関する研究成果を社会に根付かせるための力学が強く作用する状況だといえます。このような潮流があるしきい値を超えることで、AIが社会に根付き、一過性のブームとして終わらない状況になるのでは、と期待しています。

また、各企業の立場としては、自社開発した独自技術で事業を創出できればベストかもしれませんが、近年はオープンイノベーションの気運も高まっており、テクノロジーを外部、例えばアカデミアに求めて、それをシードとして自社固有の技術やビジネスチャネルと組み合わせることで、新規事業を創出することもあり得るでしょう。この意味では、アカデミアと産業界とが接点をもつことも、AIを社会に根付かせるための重要な要素であるといえます。このような状況を鑑みると、接点を生み出す場を提供することも本学会の存在意義の一つではないかと感じます。人工知能学会全国大会や各種研究会は、研究発表の場であると同時に、アカデミアと産業界の交流の場であるともいえます。会員の皆様も、全国大会や各種研究会をアカデミアと産業界の交流の場としてご活用していただき、今のAIの盛り上がりを持続的なものにするべく活動していただけますことを願っております。